

洋楽マン
列伝 No.24

No.24

横山東洋夫

前編

聞き手=篠崎 弘
写真=富井昌弘



よこやま・とおむ
1941年、東京生まれ。63年、日本大蔵高校特制卒業。舗田久人氏のもとでプロモーター業を学び、67年にユニバーサル・オリエンツ・プロモーションズを設立。アダム、ビンク、フロイド、ディープ・パープル、ボブ・マーリーなど、多数のコンサートを手がけた。現在はNPO法人環境保全センター顧問・事業推進本部長

おじいさんも喜んで貰うと喜んでくれたんですね。
うーん、教わったっていうよりも、見て覚えたっていう
毎日おぶつているわけですから。興行師では駄目だ。ブ
ーラーであれ、つてのは純削的な発想が必要つてこと。た
ゞ一リストを追っかけてるんじゃ全然面白くない。当時
ロモトターがニシシアチャイグを持っていた。今の招請会社は
けでしょ。日本舞は会場を押さええて弁当を用意するだけに
やつた。

カーメン・キャバレロにてもリンボー・ダンスにても、樋口さんが憧れや夢の対象を作つて演出した。

金をかけているよう見るのはうまかった。でも、毎回さんの口癖は「喫煙師にはなるなよ」。映像ではプロモや駄菓子で「アイデアマン」というんだ。たまたまタレント呼ぶだけじゃなく、キャラクターを作りがちの仕事だ。ロス・トレーナー・ディアマンテスは「アイデアマンの声 水晶のギタリスト」。カーメン・キバ・バレロは「アノの詩人」。何が詩人だ(笑)。リンボー・ダンカンは「大手のお菓子のコマーシャルなんかに50万円回すくらいで仲介してたんですね。本人は「コロッケだけ食べさせてりやいんだから」となんて言ってましたよ(笑)。

デ
レクターや一橋大の講義、今回も初めて業界の方々を招待して「新規開拓による成長戦略」登壇いただく。横山東洋大使さんはユニバーサル・オリエント・プロセッションズの代表取締役として、60年代のアドモからレーヴィーズ、ピンク・フロイド、ボブ・マーリーまで幅広いアーティストの興行に携わった。自称、「最後の呼び屋」。
■憧れや夢を生み出すプロモーター——
東京生まれですが、戦争中は4歳で宮城町白石町(現在は市に統合して中3までいました)。母方の祖父は漢学者で「新修通鑑」や「和字大字典」の著者で、小樽市氣太郎の父の敬教は、父の「御子」で、西浦酒造(現「農友米穀」)では山川紀長(したが)たが、豊島区の薬販社員長にならために戦後は公職追放を受けた。副園長は、江川田乱をつたうです。追放後、父は宮城町で弁護士を開

暮し始めたが5歳で亡くなり、

少しもしたくないが、それでいい。さうして、
お父さんの頃は野球、相撲と興味。中学のときに、「シェー
ン」や「アーヴィングの『生きる』を見た。歌謡曲では岡崎夫や赤井田勝
彦。特に美空ひばりの大ファンで、小さくらいでSPも整い
て、白石から結構派に詠んでいた(苦笑)。
東京へ引っ越しはじめたときも、歌を出した時にテ
ロスターの「随口」久人さんと一緒に引き合わされてカンバン待ちになっ
た。力道山が刺された翌年、1964年ですね。「随口」さんはス
タントカーの事故で右脚失っていたから、私は毎日随口さん
をおぶつて仕事先に出かけ、運営を教わった。
当時の随口さんは、随々、プロモーションから社名変更し
て、ワールド・ワイド・オーティー・アソシエーションとい
う会社名でスタントカーなんかやっていました。新聞社と組んで
「○○新聞事業部」という名前を持て、豊島園なんかを借り
て車の曲乗りを見せる。ドライバーは外国人。仕込みは安かつ

洋楽マン
列伝

そうですそうです。協同企画（後のキヨードー東京）の水島達也さんは、吉見寅次郎、通口さんは弟孚でござる。

道喜さんのが好きで、毎日ソーシャルメディアで見ています。

■永島達司さんとの戦い

116



1962年、沖縄での樋口久人氏
(提供=横山東洋夫氏)

の山本紫闇さんによれば、越路さんは東京ですか。東京の演山家としての活躍が、越路さんによると、その前にトニー・シャーリー役の山谷吉子さんを紹介して貰ったのです。トニー・シャーリー役の山谷吉子さんも宣伝してくれた。実はその前に、トニー・シャーリー役の山谷吉子さんを持っていられたつていう経験があつたんですよ。米田たのは、67年1月。僕は、ついでに次回の日曜日には、ニースオーラーまで来日する計画の記者会見を見やつたんです。「こんなにわざわざ、ソーシャンの皆さん、わざわざお見えになつたんですね。」「本当にありがとうございます。」と、山谷吉子さんと一緒に作られて、その会見の日が原石原裕次郎と三船敏郎の初共演の映画『軍事部の太陽』の製作発表とぶつかつたんですね。でも次回の新聞見出しだれども、自分が上じや位しないために、ドーンと。これほどは結構かつたのですね。いいでござりまへども、さうです。でも水島さんにも取らねちやうな笑みが一目入ります。でも水島さんにも取らねちやうな笑みが一目入ります。

向こうから「コントラクト（契約書）を送れ」とテレックスが来たんだって。それが来たんで、送つたんだって。それで、これでいいんだよって。不思議なだけだと、まだ高橋さんは動いてるのを聞こえて大笑しました。で、取られました。もう今はからばはタツ木と横山東作だつて思ひだつたです。向こうは老舗、こちらは若さと勢いがあるだけ。

ね。ピートルズ、アダモ、ボブ・ディラン

でもそれは日本での言い方ですよねえ。アメリカでは売れて

だから激しい取り合いになるような状態ではなかった。越路さんがアダモの「ろくでなし」とか、夜のメロディー、「サン・トワ・マミー」とかを歌っていた。アダモの「ブルー・ジー・ントと皮抜キンバ」は北海道放送のヒット曲、ハーレードでもかなつた。作詞家として仕事をしていた安井かずみさんは日米の間ずっと僕のカバーバンドで、ツアーワンでいたんだんです。で、彼女が「雪が降る」を日本語にした。それがヒットした。

アダモは「3大アーロディ・メイカー」と言られてましたから

でもそれは日本との言い方ですよねえ。アメリカでは売れてなかつたはずですよ。



1979年、来日したアダモと握手する横山氏。当時は毎年のように来日していた(提供=横山東洋夫氏)

「随一さんと一緒にレッグ・ゴー・ビーツルズってファン・クラブを作つて、機関誌も作つた。ファン・クラブでビーツルズを呼ぼうという戦略だ。非公認の、随口論の、全く異端のファン・クラブだ。ただ、僕は無理だと思つてしまつたよ。ファン・クラブで呼べるなんぞねえ。まあ駄目でしたけど。

